九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

未破裂脳動脈瘤を有した急性期脳梗塞患者に対する抗血栓療法の安全性に関する研究

https://hdl.handle.net/2324/4110423

出版情報：九州大学, 2020, 博士（医学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

（別紙様式２）

氏　　名	生野　雄二
論　文　名	Safety of antithrombotic therapy for patients with acute ischemic stroke harboring unruptured intracranial aneurysm
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　二宮　利治 副　査　　九州大学　　教授　　飯原　弘二 副　査　　九州大学　　教授　　吉良　潤一

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

未破裂脳動脈瘤を有する急性期脳梗塞患者に対する抗血栓療法の安全性は明らかになっていない。本研究では、未破裂脳動脈瘤を有する急性期脳梗塞患者に対する抗血小板療法、抗凝固療法、経静脈的血栓溶解療法の安全性を検証した。

福岡脳卒中データベース研究に 2007 年 6 月から 2014 年 12 月に登録された急性期脳梗塞患者 9149 例のうち､脳血管画像および脳梗塞発症 3 か月後転帰のデータを有する 8857 例において、未破裂脳動脈瘤の有無別に有害事象（定義：頭蓋内出血または入院中死亡）の頻度を比較した。さらに、脳梗塞発症 3 か月後の modified Rankin scale score 3 点以上を転帰不良と定義し、未破裂脳動脈瘤の有無と脳梗塞後転帰不良の発生リスクの関係をロジスティック回帰分析を用いて検討した。

対象者のうち、412 例(4.7%)において未破裂脳動脈瘤を認めた。未破裂脳動脈瘤の平均径は 4.1±3.2㎜ であった。未破裂脳動脈瘤を有する患者と有しない患者間に有害事象の頻度や脳梗塞後転帰不良の発生リスクに有意な差を認めなかった。さらに、抗血小板療法、抗凝固療法または経静脈血栓溶解療法の施行群において同様の検討を行ったが、いずれの群においても未破裂脳動脈瘤合併による有害事象の頻度および脳卒中後転帰不良のリスクの上昇を認めなかった

以上の成績は、急性期脳梗塞患者において抗血栓療法による有害事象や転帰不良の発生リスクは、未破裂脳動脈瘤の有無により影響を受けないことを示唆するものであり、この方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験は、まず論文の研究目的、方法、実施成績などについて説明を求め、各調査員より専門的な観点から論文内容およびこれに関連した事項について種々の質問を行ったが、いずれについても概ね適切な解答を得た。よって、調査委員合議の結果、試験は合格と判定した。